京都大学文学研究科　グローバル COE　「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」

学会発表渡航支援報告書

（ふりがな） 氏　　名	なかじま　　みつひろ 中島　　満大	所属・職名 京都大学大学院文学研究科　博士後期課程 2 年
e-maill	mitsuhiro.nakajima@gmail.com	
発 表 題 名 （英　　語）	Children out-of-wedlock in a Japanese seaside village, 18-19th centuries	
著　者　名	Emiko Ochiai and Mitsuhiro Nakajima	
会　議　名 （英　　語）	35th Annual Meeting of the Social Science History Association	
開催地（国、市）	Chicago, USA	
参 加 期 間	2010 年 11 月 18 日　　～11 月 21 日	

報告者は、グローバル COE による学会渡航支援を受けて、2010 年 11 月 18 日から 21 日までアメリカのシカゴで開催された第 35 回社会科学史学会（35th Annual Meeting of the Social Science History Association、以下 SSHA とする）に参加し、研究発表を行った。SSHA は、報告者の研究領域である「歴史人口学」において、最先端の議論が行われる場である。またヨーロッパやアジアをはじめ、多くの国から研究者が参加しており、様々な地域の研究成果を統合する場にもなっている。加えて、歴史人口学に限らず、家族史、ジェンダー研究、政策研究などの研究報告が行われており、領域を横断する柔軟な議論がみられることも SSHA の特徴である。

報告者が参加したのは、「In Homage of Richard Wall and the 25th anniversary of Conitinuity & Change: Household, Family and Marriage Across Time and Space(Ⅱ)」とタイトルがつけられたセッションである。このセッションでは、歴史人口学や家族史などの研究を深化させたケンブリッジグループを代表する研究者、リチャード=ウォールの業績を再検討・再解釈することを主たる目的としていた。またコメンテーターとして、歴史人口学、発展途上国の人口学を専門とするアンドリュー=ヒンディ（Andrew Hinde）が議論に加わった。

今回、報告した内容は、近世日本における海村の宗門改帳をデータとし、徳川時代後期におけるライフコースの比較を中心に据えたものであった。そしてライフコースを比較する視点として「婚外出生」を用いた。本報告では、「婚外出生」について、二種類の操作化を行った。ひとつは、「婚外出生」を、子どもが生まれた時点で母親が婚姻状態にない出生と定義した。もうひとつは、子どもの両親が不明、あるいは片親が不明の場合の出生を「婚外出生」とした。それらの定義を用いて、「婚外出生」と「婚内出生」の属性により、その後のライフコースが異なるのかどうかを仮説とし、報告を進めた。

学会発表渡航支援報告書

本報告の結論としては、「婚外出生」の属性を持つ場合とそうでない場合のライフコースにおいて、「養子（20 歳未満の移動）」の割合では差がみられたものの、それ以外のライフイベント（5 歳未満の死亡、結婚、戸主など）では顕著な差を確認することはできなかった。したがって、今回の結果からは、「婚外出生」の属性を持つ子どもが、その属性を持たない子どもと比較しても、差別を受けていなかったことと言える。

本報告に対するコメントとしては、第一に「日本以外の海村や漁村においても、「婚外出生」がみられること、そして「婚外出生」を海村の特徴としてよいのか」という点、第二に「「婚外出生」をプロセスとしての結婚に位置づける際に、ジョン=ボンガーツのモデルを参考にした方がよいのでないか」という点が主たるものであった。第一点は、SSHA の特色である他の地域との比較に関するコメントであり、第二点は、人口学のモデルとの比較についての提示を求めるものであった。どちらとも報告者にとって、大変貴重なコメントであり、それをもとに今後の研究を深めていきたいと思う。